

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年一月作品集

縮景園 ちどり

広島市内に住んでいるながら、私は縮景園に行つたことが鼓回しかありませんでした。今回、ガイドさんに園の自然や歴史について詳しく話してもらいながら、園内を一巡りしました。園内の自然には、あちこちに目を見張るものがありました。中でも、最も印象に残つたのは、原爆投下によつて園の近くの猿猴川で多くの入々が命を落としたこと、そして三本の被爆樹木(松、イチヨウ、ムクノキ)が、今もなお園内で生き残っていることでした。

冠木門入りてすぐ横寒の木瓜

冬の園ガイドの話聞き巡る

どの松も同じ高さに菰巻かれ

湧き水に冬の鯉みを集まりて

寒禽の声の飛び交ふ竹林

寒禽が園の内外を行き来せり

松の葉に公孫樹落葉の散り掛り

落葉掃く人の手を止め話し出す

青々とした被爆の松に菰巻かれ

園の端被爆の棕の葉ゆる

《作品鑑賞》

井藤希

田園風景やそこでの生活をよく詠まれているちどりが今回、静謐さの中に美しい動きのある縮景園の冬景色を特別作品に詠まれた。

冠木門入りてすぐ横寒の木瓜

表門を入れてすぐに目に入ってきた木瓜の花、色彩に乏しくなる冬の庭園の中で、その赤い花はこそ印象的だったに違いない。庭園巡りのわくわく感が素直に伝わってくる。

寒禽の声の飛び交ふ竹林

寒禽が園の内外を行き来せり

冬木立に鳥たちの意外と大きい鳴き声と盛んに飛び交う姿、庭園の静けさの中で冬場も変わらぬ生きものの息遣いが、聴覚と視覚で感じられる。

園の端被爆の棕の葉ゆる

このムクノキは被爆樹の中でも特に樹勢が衰えていると言われている。この句はその樹に寄り添う作者のやさしさと励ましの気持ち溢れていて「葉ゆる」がほのぼのと暖かい。

佐保光俊

雪雲の押し寄せてる北の山

神の山過ぎて俄かに吹雪きけり

高尾ひとみ

また雪の降り頻りをり窓眺む

その下を通れば落ちて松の雪

あざみ

降る雪や山へと上る細き道

庭の雪山鳩猫の跡並ぶ

亜矢

雪の夜や病棟の窓見上げたる

窓開けて子と雪を見る朝かな

綾乃

鍛へ終へ熱き体へ雪花かな

雪風の舞うてデルタの街暮るる

井藤希

まづ雪を拭うて参る父母の墓

大樟に音立ててる雪時雨

大畑恵

留守の間の初雪残る庭の陰

しばらくは冠雪の富士見て通る

暁子

大雪のすてに止み月上りけり

雪載するポストに落とすエメール

すみれ

雪景色目覚めて顔の綻ぶる

粉雪の上へ下へと舞うてをり

知佳子

初雪の空気を胸に吸ひ込めり

雪道を行く子に今朝も声かける

ちどり

しんしんと雪降る里に帰りけり

吾子二人入るかまくら作りけり

辻純江

亡き夫に見せたき蓼科山の雪

雪残る道に朝日や雀鳴き

雲雀

眉にまで降る雪払ひ帰り道

降りしきる雪や我吸ひ込まれゆく

ふじ女

青空の頂点に浮く雪ちらちら

漁港には繋がれた船倉の雪

松田裕子

朝からの雨しんしんと雪になり

風花がひとひら窓を開けたれば

村上正人

静寂なり雪の果てまで空に星

雪晴や明けの日差に眩惑す

森口良樹

下駄の音止めて見上ぐる雪催

庭に差す朝日に雪の輝けり

秋楡

樹へと帰る鴉も雪催

今井淳子

大山を恋ふれば雪の舞ひ嬉む

大原良子

突然の冠雪の富士散歩道

上島康子

初雪や自転車押して渡る橋

上條忠

ともしびの残る暁雪が降る

河原静子

真夜中の雪しんしんと降りつづく

紀英子

日の差して雪降る庭に立ちつくす

熊谷ゆり子

さまざまな足跡続く雪の駅

桑門わかこ

襖ごし母の眠りて雪しづか

桜湯

降る雪や忘れしバッグ取りに戻る

志路猿

故郷は遊ぶ子も居ず雪白し

高嶋彌代

初雪や明日東京へ立つ予定

高梨英子

雪女郎何か事情があるのでしよう

竹田千紘

ぬいぐるみ積みたる車雪明り

民

屋根に積む雪どさどさと落ちにけり

土肥律子

波滞の見知らぬ町の雪景色

なつ

冠雪の富士ずっと見て旅の空

撫子

窓の露をぞれば外は雪景色

古川廣子

照らされて降る雪眺む暖の中

前田範子

雪の朝新聞配るタイヤ跡

松本卓士

温泉や座敷の妻と雪の音

みさ子

北向きのベランダすこし雪の積む

美耶

初雪や故郷の母へ電話する

やす保

庭の葉の雫となりし今朝の雪

山崎桂子

雪の朝わああと広げる小さき手

山野ウタ

家ごとに雪だるま置く里の道

弥生

雪積もり夜更けの町の静けさよ

和田史子

赤き実に初雪の積む窓辺かな

矢のやうに木の葉を散らす一樹かな

遠く見て名前を知らぬ冬の山

冬木立赤子抱かれて通りけり

涸川や水際に残る靴の跡

涸川の流れ着きたる鳥の羽根

参道を埋めどんぐりの木の落葉

祭神の遷されてるし冬の水

枇杷の花山裾深く人の住み

枯木山どちらの道も沢に尽き

竹林の音立ててる馬日かな

朝日差す幹太々と冬木立

枯蘆の累々として馬洗川

冬霞流れて背戸の山隠れ

近寄れば鳥の声する冬木立

葛枯れて林にモダンアートかな

歳晩の川辺に吾と鳥と風

お元日川に向かひて人謡ふ

この町に降れども積まぬ雪の舞ふ

臘梅に蒼と人の教へくれ

鳥声のほかは聞こえぬ冬野かな

山茶花の庭のそちこち咲きにけり

焼藪を割り怪我のこと尋ねけり

臘梅の風来る裏の畑より

マスクとる鏡の私父に似て

初日さす社の上に舞舞へり

初写真幼子動きもう一度

たちまちに雪となりたる景色かな

窓の雪眺め足踏み二分間

膝ついて小籠に摘みし冬菜かな

庭の木に寒雀来てにぎにぎし

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

しばらくは灯台見上げ冬の鵞

冬の草見つつ灯台ひと巡り

灯台のそばで聞きたる冬の波

灯台の回りを歩く冬青空

小型船行き交ふ冬の瀬戸の海

数へ日の卓に書類を積みよぐる

鉄塔を見上げて下る冬の山

桃色の岩塩を振り薬喰

着ぶくれてデイスリーブスへ母の行く

蜘蛛の巣の輝いてる冬の空

数へ日や酒屋は美味き酒並べ

匂の道のなんとはるけし初御空

清らかな滑らかな子の初髪よ

娘とふ甘えよさらば初鏡

寒木瓜や吾子は母校へ実習に

息白き吾子よ令格絵馬揚ぐ

目覚むれば雪燦然と比良比叡

鈍色の湖より天へ初比叡

鮎脂を味はふ舌に今年酒

おんおんと絵風唸らす比良おろし

寺までの磴百段の木の景雨

妻の撞く鐘の音冴え鞍馬寺

牛岩を鍛えし山か冬木の芽

枯山を下れば貴船川の音

天辺に鳥鳴きたる枯公孫樹

鶯の輪の冬至の空にかかりけり

犬の踏む枯葉の音を聞いてをり

年の夜や寢際に鐘の遠く鳴り

明けてゆく日浦山の影の淑気かな

駅伝の聞こえてるたる二日の湯

亞矢

綾乃

井藤希

兄居らぬ庭に石榴の実の赤し

朝の庭南天の実に鳥の来て

帰り来し息子の褒むる実南天

山茶花や見上げる度に花の増え

山茶花の散りつつ咲いて掃かれけり

庭先の陰にいつもの実万両

新しきビルの谷間に初日の出

よき言葉かみしめてをり初神籤

裾野より冠雪の富士見てるたり

雪降つて富士の裾野の広きかな

大畑恵

四阿やけふは綿虫良く飛んで

浮寝鳥水面の木々の影と揺れ

仏坂越ゆれば展け鶴の里

田鶴遠く里人畦に手をかざし

田の神の花筒けふも凍てしまま

外は雨餅脹るるを見てをりぬ

初自動車は千尺先のポストまで

みどりごの抱かれ餅花触れてをり

常の木に常の雀や寒の入り

風花や通りに人の影を見ず

暁子

何時になく蕾の多き臘梅ぞ

裏山の裾野に切つて齒朶飾る

村おこしの注連縄飾り貫ひたる

寄せ植ゑの真ん中に入れ福寿草

ハムスター連れて年賀の子の家族

竹林の積れる雪の下通る

涸川やあまねく石に雪を載せ

風邪の夫声出ず我を手まねきす

笑ふ子ら去りて静まる寒の入

雪解けの霰ばつりと雪に落つ

すみれ

家の灯の見ゆる辺りや帰り花

冬の虹架かる辺りに友の位む

後輩の通夜に行く道年の暮

それぞれの好む具を入れおでん煮る

友見かけ背より声掛け日脚伸び

いくたびも写真見返す年賀状

文庫本にしをりを挟む去年今年

御降りを拭ひ訪ねる山の寺

花びら餅寄せばかすかに香りけり

風に乗る火の粉見てをりとんど焼

知佳子

大鍋でなかなか煮えぬ芋煮会

芋煮会隣の家にも持つて行く

外堰で鴨それぞれに水尾を引く

裁判所前を通れば落葉の香

冬の朝母の窓見て吟行へ

朝霜や道の右側解けてをり

餅搗の合ひの手夫がしてをりぬ

あちこちに幼子と夫餅配る

幼子と母屋の裏で雪合戦

吾子二人かまくらに入り写真撮る

ちどり

山茶花を数へて今日の始まりぬ

手を伸ばし臘梅剪つて瓶に挿す

大いなる大山を見て息白し

夕暮の空から鷹の降りけり

門松と犬も一緒に家族写真

古座敷教留多読む声聞こえる

三日なり吾子を馭まで見送つて

積もりたる雪にそおとと指差せり

雪の道犬の足跡踏んで行く

雪原に雀跳ぬるを見てをりぬ

雲雀

出汁のみの雑煮味わう淑女かな

乾杯の音頭短き二日かな

ワインバー恩師と集う成人の日

カーブ過ぎまた水仙の盛りかな

大寒の海辺キャンプの鍋並ぶ

焚き火して海風に香を炊く男

ドア開けて夜に現る寒オリオン

山茶花の散り敷く影の色は桃

山を見て海と港を見て湯冷め

頬白は一羽隠れて一羽鳴き

ふじ女

根に躓き落葉に滑り日浦山

風が窓を震はせ仕舞風呂

北風受けて赤信号を待ちるたり

古書店へ本提げてゆく町師走

息をせり御節料理を作り終へ

白雲へのぼる鶯や初御空

初夢よ亡き妹と笑ひ合ひ

ゆつたりと日の出を見たる四日かな

硝子戸に張り付いてるる六花かな

花好きの友訪ふシクラメン抱いて

松田裕子

初明り部屋の奥まで差し込めり

雪の中務め終へたる法事かな

雪の坂すれ違ふ人氣遣ひぬ

屋根にむす苔より雪の霽かな

トンネルを抜けて畑野や斑雪

子等の声高くて雪の通学路

冬紅葉車椅子押す日差かな

雪拭ふ車椅子母乗せたまま

散歩して交はす挨拶日脚伸ぶ

沓脱に水仙香る友の家

村上正人

悴みて日赤行きの電車待つ

対岸へ橋を渡れば片時雨

風花やステージⅢの余命問ひ

ふんはりと背ナに冬日を受けてをり

電飾の増せる輝き冬の雨

筆立に並んで置かれ室の花

松葉蟹爪に大きなタグを付け

数へ日や張り替へられし時刻表

朝日差す轍に光り霜柱

在宅の長き一人や冬の梅

柿落葉拾うて入る里の家

冬紅葉残りし一葉けさ掃きぬ

小春日や網を繕ふ人の影

冬の日やミルクの湯気の揺れてゐて

双子座に土星近づく冬の夜

冬日和タイヤ交換眺めをり

明玉の傍の昼餉や年の暮

ストーブを背にして待てる饅飽かな

寒灯へ紛れてゆける尾灯かな

銀杏のまた弾けたり一人酒

また一人欠けし兄弟枇杷の花

軍服の父は十年年新た

裏庭の日溜りに摘む菘かな

物干しに寒獅ゆるる山家かな

ふるさとの紅橋や湖牙えて

雪載する車も混じりラッシュ時

煮凝りや何やら夫の独り言

またひとつ指を伝ひて霜嘩

森口良樹

秋楡

今井淳子

冬ぬくし助手席で歌口遊み

凧や町内放送反響す

旧作の記念上映星冴ゆる

冬晴やプレイリストを編集す

カビバラの写真集買ひ日向ぼこ

造船に勤めし祖父や冬深し

年新た最新機種のスマホ買う

息白しゆつくり鳴らすインターホン

寒椿二つ結びに憧れて

竹田千絃

鯉城から見下ろす街の紅葉かな

冬の虹櫓の廊下ひんやりと

一本の引き寄せられぬ冬紅葉

鴨の陣旅人となり眺めをり

街路樹に雨宿りして夕時雨

三人で年越蕎麦をすすりをり

対岸に宮島大き去年今年

どこことなく母の面差し初鏡

露天風呂静かに冬の雲流れ

土肥律子

お土産にどうぞと言はれ大根引く

鳥声に誘はれて出る冬の庭

とりどりのマフラーの子ら窓開くる

遠き田に餌ついでみて鶴三羽

子と立ちてただ船を見る冬の暮

冬の暮車の中の時計見る

年の暮娘の仕事見届けに

白き雪圍の空から車窓へど

子と共にそろりと歩く雪の朝

なつ

幼子の指の跡へと障子貼る

鉄路に沿ふ草枯を見るホームかな

一本の襟巻を巻く二人かな

熱焔を手酌で一人テレビ見て

風花を両手で受くる親子かな

冬ざれの海の平らに鳥の宿

霜菊を跨いで筑を取りに行く

大寒や筑を広げて鳥の家

雪しまく柱時計の針進み

山野ウタ

枯葦に光燦々鳥あまた

葦叢のゆるき流れに浮寝鳥

川凍てて黒き魚影の動かざり

図らずも増上寺にて初詣

初富士やスマホ高目に立ち止まり

書初や恣心となりて墨を磨り

大原良子

仕舞湯に柚子のお手玉してきりぬ

去年今年友の点滴見つめをり

神の鳥真向ひに見て初湯かな

松の内地震を知らせる低き音

成人式子の背をポンと送り出す

高梨英子

枯芝に二羽の鴉の舞ひ降るる

吹雪く中ランナーのゆく吉備路かな

立ち飲みのおかげ横丁冬ぬくし

ビリビリと表紙を破り初暦

壁に掛け魁夷の碧の初暦

草庵や空蟬のこる実千両

手のひらに触れて消えゆく細雪

仏壇に雑煮供ふる日の出かな

冬の朝鉄瓶に沸く湯の甘し

欄干の雪に小さき指の跡

お飾と古き護符焼く焜炉かな

左氏伝を炬燵に読める夜更けかな

信子を待つ人の背に雪の付き

水仙の風に香れる小庭かな

年の瀬の神に会ひたき伊勢路かな

撫子

前田苑子

松本卓士

ばんやりと灯る社へ初参

元朝の郵便バイク坂上る

雪降つて対岸の町見え隠れ

冠雪の山見て珈琲飲んでをり

老梅を大玉松と整ふる

美耶

末つ子のセーター繕ふ日向かな

まん丸の沢庵石の冷たさよ

年の瀬に朱塗りの箸を求めたり

年玉で求めし靴に紐通す

雪だるま残して孫ら帰りけり

和田史子

冬の浜すこし歩けば翳りけり

吹きつり崖に飛びけり波の花

山里に嫁して聞きをりしづり雪

山里に暮らして搗きぬ寒の餅

桑門わかこ

初笑ひ仏の前に仮装して

朝まだきとんど知らする花火揚ぐ

富士の雪新幹線の窓に見て

雪女臨時列車に飛び乗るか

よこななめたてからも降る初雪よ

隔てなく隣の屋根も雪積もる

庭の木はみな枝垂れて雪積もる

寄せられて三日四日と雪残る

年用意色紙を千に替へにけり

ひと声に声高となり初電話

笑ひ声まだまだ続く歌留多かな

子ら帰り窓辺に見ゆる牡丹雪

高嶋銅代

氏

やす保

中洲へと二羽の白鹭舞ひ降るる

息切らし石段上る初詣

芸備線窓から見たる秋景色

冬林檎父母の墓前に二つ置く

雪が舞ふ陽に銀色に輝いて

宮島の紅葉並木を散歩する

日脚伸び列車の外の景色かな

街灯がスポットライト夜の雪

元旦や神社に長き列つづき

上島康子

上條忠

河原静子

道ゆけば痛し頬打つ雪霰

落雪の堆きこと寺の庭

大雪に訪ふ人のなき山の寺

紀英子

煌々と弥山に灯し去年今年

初詣のど鮎合み並びたる

雪載せて我が家の松が名木に

熊谷ゆり子

青空に一筆書きか秋の雲

三段の満天星紅葉仰ぎ見る

忘年会笑ひ弾くる女子らかな

桜陽

産土に拍手を打つ初詣

故郷の庭に踏む雪懐かしき

志路猿

雑煮餅敷を言ひつつ夫笑ふ

マフラーを結び直して街へ行く

古川廣子

初メール既読となりてお茶とする

雪降るも景色とならず止みにけり

みさ子

車道にも蜜柑ころがる大三島

山茶花の赤が際立つ景色かな

遠山に光環も見え初日の出

初雪をプールで眺めエクササイズ

山崎桂子

弥生

令和七年十二月度作品集より

井藤希 私の選んだ十句

冬菊に大山を見る我の影	佐保光俊
寒蛭一粒づつの光かな	亜矢
黙々と紅葉踏みゆく遍路かな	大畑恵子
冬林檎食べ頃問うて揃ぎにけり	知佳子
背丈ほど撥ねて団栗藪に消ゆ	森口良樹
文案の太棹染みて冬の星	秋楡
紅葉の舞うてをるらむ忘れ物	今井淳子
昇る月沈むとも見え旅の駅	なつ
冬うらら口紅の色迷ひをり	土肥律子
ひらがなのクリスマスカード届きたる	撫子

すみれ 私の選んだ十句

吉備線に寄つては離れ赤とんぼ	佐保光俊
どう行こう団栗あまた散る小道	高尾ひとみ
亡き母の編みしコートに手を通す	あざみ
食べたき物食べて勤労感謝の日	亜矢
日かげれば映はたちまち冬の色	暁子
茶の花のありやなしやの匂かな	知佳子
今年またせすにをられぬ吊し柿	雲雀
山々の浮いて見えたり冬霞	村上正人
あれこれと手元に置いて炬燵入る	山野ウタ
年忘ピンゴゲームで締め括る	高梨英子